



東大寺二月堂から、沈む夕陽を望む

第5話

望月の駒

はじめに

8月14、15日は奈良春日大社の万灯会で、神域の森に点在する約3000基の灯籠のすべてに灯がともる。人々はさまざまな思いを託して献灯する。火袋に灯がともるまでの時を過ごすのに、もってこいの場所がある。それは東大寺大仏殿裏にある舞台造の二月堂である。茶店の絳毛せんに腰を下ろし、氷水を隠ですくいつつ眺める夕日、至福の時である。「うわっ」とか「おー」とかの感嘆の声以外は何も聞こえない。老いも若きも氷をすくう匙を宙に浮かせたままだ。

夕日はうねうねと続く生駒山に沈む。まばたきをした一瞬に沈んだ夕日の、ほのかな残照のみが山の端にある。

夕日の沈む生駒山(標高642メートル)と同じ音で思い出すのは民話「望月の駒」の生駒姫である。これは望月の御牧があった頃のことで、牧の館の姫と同じ日に生まれた月毛の駒のお話である。

はてな? 「いこま」って、どういう意味? と疑問が頭をもたげた。

民話に理屈はいらない。語られている事実だけを読み取ればいいという考えもあろうが、民話が生まれるにはそれなりの背景があるのだらうから、それらをさぐりつつ祖先の思いに近づき、かつ、新しい発見をしたりして語るのも、再話者に与えられた課題であると考えるのが。

さてさて、子どもの命名に、親たちは万感の思いを込める。字面から成長した姿が描けるようにとか、字の持つ意味や響きであるとか、とにかく心を込めて名づけるのは、今も昔も変わらないだろう。

生駒姫も牧の内に生まれたのだから、「駒」のように健やかでとの思いは自然であるが、では「生」ってどういう意味かと、奈良県生駒市の生涯教育課の鐘好見さんに尋ねてみた。諸説ある中で、一番先に出たことは「い」とは韓国語の接頭語で、「まこま」とは古代韓国にあった高句麗(こうくり)のことだそうである。

「生駒」が古代の韓国語に由来するといううれしい火種をいただいたので、「いこま」の語源を推理してみようと思立った。

「生駒姫よ! 千年の時空を越えて、あなたを「生駒」と命名された父母の思いが、わかるかもしれない」などつぶやきながら、奈良と大阪の県境に連なる生駒山系を思い出すにつけ、山姿がなんと馬の背に似ていることか。山頂から山裾への眺めは馬上から馬の腹あたりを見ている感じがある。

まず語源をたどる場合、漢字にとらわれずに発音に則して(かなに直して)考えるのが基本原則である。「生駒」の「い」について、古代韓国語の「い」には、「聖なるとか、尊い」という意味があるという。このことは、小林恵子著「聖徳太子の正体」(文芸春秋社刊)の李家熙(イヨンヒ)説にある。その説によ